

反逆的な恋愛と結婚-葉陶〈愛の結晶〉を再読する

Rebellious Romantic Love and Marriage: Reconsidering YEH Tao's "Ai no Kessyô"

張 文聰

Chang Wen Chung

Abstract

This study aims to re-evaluate Yeh Tao, a Taiwanese writer of Japanese literature of the Japanese Colonial Rule Period, via re-reading her only work "Ai no Kessyô" (lit. "Crystallization of Love"). First, this study elaborates the relationship between *La Formosa Nov-Literaturo* (which published "Ai no Kessyô") and the Japanese magazine of the left *La Givdanto Literatura* while raising questions about the review given by the editor Kishi Yamaji. Next, this study identifies the similarities and differences between "Ai no Kessyô" and other previous Japanese proletarian literary works of female writers in the 1920s and 30s. Then, an analysis of the context of the disputes in Japanese proletarian literature brings out the fact that marrying-in-love, and therefore "Ai no Kessyô", were dismissed as insignificant. Romantic love ideology was introduced to Taiwan by overseas students back from Japan during the 20s. Originally a successor of the Taisho discourse on love, in Taiwan it was intertwined with social movements. Furthermore, this study offers the perspective of "female students community", which clarifies the historical setting of "Ai no Kessyô" based on the emergence of female students and women's and peasants' movements in Taiwan during the Japanese Colonial Rule Period. Finally, referencing to Adrienne Cecile Rich's "lesbian continuum", this study argues that with the ideal of fighting against colonialism and feudalism with cross-class female coalition "Ai no Kessyô" is beyond proletarian literature. Previous studies focused on Yeh Tao's identity as a wife, which inevitably made her subordinate of men. This study argues that she carried the motif of the female writers in Japanese proletarian literature forward to a whole new horizon in the unique backdrop in Taiwan, and hence that Yeh Tao is entitled to represent literature of Taiwan of the era.

Key words

Japanese literature, Japanese Colonial Rule Period, Yeh Tao, female students community, lesbian continuum

キーワード 日本語文学、日本植民地時期、葉陶、女学生共同体、レズビアン連続体

1. はじめに

葉陶は日本植民時期における数少ない女性作家であるが、楊逵の妻としてよく知られている。楊逵は「新聞配達夫」によって日本の中央文壇で名をあげ、雑誌『臺灣新文學』を創刊するな

ど、日本植民時期における最も重要な作家の一人である。

葉陶は1905年高雄州旗後町（現高雄市旗津区）に生まれた。私塾で漢文を学びながら、高雄打狗公学校を卒業した。その後、台南女子公学校付属の「教員養成所」で三ヶ月の訓練を受け、「教員心得」として、母校の打狗公学校（後に高雄第一公学校に改名）、高雄第三公学校に勤めた。1926年、「台湾農民組合」に加入し、農民運動に参加する。1927年には「台湾農民組合」の婦女部部长となり、台湾各地を廻って、「婦人と無産階級運動」、「製糖原料採取価格」などのテーマで講演している。1928年、教職を辞め、農民運動に専念したが、その年末に台湾農民組合の内部闘争で除名された。この頃、日本から帰って台湾農民組合に加入した楊逵と知り合って結婚した。1935年、台中にて楊逵とともに雑誌『臺灣新文學』を創刊した。楊逵は編集、創作を担当し、葉陶は営業、募金、出版などの仕事を担当した。病弱な楊逵が創作に専念できるよう、葉陶は家庭教師、花売りなどで一家の生活を支えた。戦後の二二八事件などで、葉陶は台湾総督府と国民党政府に十数回逮捕され、入獄を繰り返した。1949年に楊逵が12年の懲役を言い渡された後は、一人で五人の子どもを養い、1970年、心臓病で生涯を閉じた。講演は題目しか残されておらず、現存する葉陶の作品は「愛の結晶」と、釈放された楊逵との生活を描く詩「我的教練真嚴厲」（聯合報、1962年）二作のみである。

「愛の結晶」という作品は、1936年2月6日出版の『臺灣新文學』の附録『新文學月報』第1号に掲載された。実はその前に、日本の左翼文学雑誌『文學案内』同年3月号の特集「新女性作家作品号」に、葉陶は「愛の結晶」を投稿している。残念ながら採用されなかったが、選者貴司山治が評価を残している。貴司は、「愛の結晶」は「もっとテーマに肉が付き、人物が實在的に描かれ、表現がもっと巧みにならないと、小説といへない」¹ので、入選からはずれたという。小説の技法が未熟という点は、夫である楊逵の「新聞配達夫」も受けた批判だが、「もっとテーマに肉が付き」と評されているように、作品の読み応えの点、とりわけ枚数が少ない点は影響が出たようだ。貴司の批判は本作品の欠点を的確に指摘したものとして、後の研究でも参照されており、「愛の結晶」が、「新聞配達夫」のように中央文壇で注目され得なかったのは、技法の拙さの上に、作品の短さが響いたからだと考えられてきた。

先行研究には、歴史学の領域における成果が多い。例えば陳慈玉編の『地方菁英與臺灣農民運動』²に収録された、張季琳「葉陶—臺灣農民運動的「土匪婆」」と陳翠蓮「菁英與群眾：文協、農組與臺灣農民運動之關係（1923-1929）」は、1930年代台湾における農民運動との関係などをも詳細に論証し、葉陶が「楊逵の妻」というだけではないことを論じた。また、全集とは言えないが、康文榮編の『土匪婆 v.s. 模範母親：楊逵的牽手葉陶』³は、葉陶研究に関する資料や文章を網羅的に収録している。例えば葉陶の孫娘である楊翠の「閱讀葉陶的風華」、「陰鬱的墳場・暗濕的子宫—「愛の結晶」與葉陶時代」など、葉陶の生涯と作品を分析している。修士論文である趙惠敏の『自書與他敘—葉陶的文學與生命史研究』⁴は、女性の生命史という方法を用いて、葉陶の文学作品と生涯を有機的に考察し、「愛の結晶」には、30年代台湾女性が公／

私、夢／現、自我／他者、内／外を絶えず行き来している様子が描かれていると論じた。

本論文は、まず同時代評の貴司山治の選評への疑問から出発する。「愛の結晶」の落選の理由は「技法の拙さ」と「作品の短さ」のみなのか、『文學案内』同号に入選した作品の選評と合わせ再検討したい。また、先行研究では30年代台湾の社会運動や文学背景、また葉陶の生涯に関心が集中してきたが、投稿した『文學案内』や葉陶と当時の日本文壇との関係はあまり論じられていない。本論文は『文學案内』と『臺灣新文學』を比較し、30年代までの日本プロレタリア文学女性作家の作品なども視野に入れて考察する。また、葉陶の「愛の結晶」を読み直すことによって、文学の視点から、「楊達の妻」というだけでない、葉陶の独自性を明らかにする。

2. 1930年代における〈愛の結晶〉の意味

2. 1. 雑誌『臺灣新文學』と『文學案内』

まず「愛の結晶」が投稿された日本の『文學案内』と、「愛の結晶」が掲載された台湾の『臺灣新文學』、二つの雑誌について比較してみたい。

『臺灣新文學』は1935年12月に創刊された。この雑誌の実質的編集者は楊達であり、出版や総務の仕事を葉陶が担当している。「創刊の言葉」は以下のようなものである。

私は色々考へて見た。さうして得た結論は、臺灣の作家の爲めにも讀書家の爲めにも、臺灣の現実に沿ふた文學機關が緊急必要であると言ふことだ。ところが誰もそれを與えて呉れる様子は見えないのである。作家も讀者も、こうなつては「塵も積れば…」と言ふ筆法で、自分達の零細な金を集めて一つの舞臺を建設し、育てゝ行く必要がある。自分達で勵み合ひ而して大いに景氣をつける必要がある。これ即ち「臺灣新文學社」の創成記。(下線は筆者、以下同)

『臺灣新文學』は台湾文芸連盟から分裂して発足した雑誌である。「臺灣の現実に沿ふた文學機關が緊急必要である」という部分には、台湾文芸連盟が台湾の現実に沿っていないという批判がこめられており、台湾文芸連盟の機関誌『臺灣文藝』との対立路線を打ち出したことがわかる。『臺灣新文學』は台湾人が台湾のために、台湾の現実を描く文学誌として出発し、「台湾人」というアイデンティティを明確に立ち上げた雑誌である。また、日本「内地」のプロレタリア作家との連携に努めようとする姿勢と、中国語による創作欄の盛り返しに積極的な意欲をもって臨んでいた⁵ことが指摘されている。

一方、『文學案内』は1935年7月～1937年4月に発行され、貴司山治が中心になって、編集顧問に藤森成吉、徳永直、徳田秋声、青野季吉等を擁している。『文學案内』は政治的任務から解放された文学活動を目標とし、旧ナルプ系の文学者だけでなく、進歩的立場を取る文学者を幅広く包含する雑誌である⁶。『文學案内』は植民地の作家と文学に、非常に興味をもっていた。例えば1936年新年増大号に朝鮮作家張赫宙と、台湾の頼和の作品を掲載し、同年6月号には張赫宙と楊達による朝鮮と台湾文壇の作家と作品の紹介を載せている。そして、女性作家の育成

にも力を入れている。1936年3月号の「新女性作家作品号」には、新人女性作家の作品三編を掲載しただけでなく、イブセンやエレン・ケイなどを紹介した「世界文学上の婦人」のコラムや、野上弥生子や林芙美子など当時活躍していた女性作家の論文、「新鋭婦人作家論」や「働く婦人のレポ」などを収録している。葉陶は作品こそ掲載されていないが、名前があげられており、日本中央文壇に登場したといえよう。

では、『臺灣新文學』と『文學案内』には、どのような関係性が認められるだろうか。まず、両誌ともエスペラントの雑誌名をもっている。『文學案内』の表紙には「LA GIVDANTO LITERATURA」、『臺灣新文學』の表紙には「LA FORMOSA NOV-LITERATURO」という、雑誌名のエスペラント表記が付されている。エスペラントは、ポーランドの眼科医ラザロ・ルドヴィコ・ザメンホフ(Lazaro Ludoviko Zamenhof, 1859-1917)が1887年に創案し、民族の言語や文化をその歴史的遺産として尊重しつつ、それぞれの言語の橋渡しの役目を果たすことを目的とした言語である⁷。両雑誌におけるエスペラントの使用には、異民族異文化との連携を図ろうという姿勢が感じられる。

また、『臺灣新文學』は附録『新文學月報』を出しており、『文學案内』には附録『文學新聞』がある。『新文學月報』も『文學新聞』も「誌友クラブ」から発展し、誌友(購読者)に無料で配布したという共通点がある。内容も類似しており、「アンテナ」欄に載りきれない購読者のコメントや意見や通信などを載せ、雑誌を補完する役割を担っていた。葉陶の「愛の結晶」はこの『新文學月報』に載ったものである。

さらに、より具体的な関係性もある。1936年4月号の『文學案内』には、「全国主要同人雑誌総覧」⁸という、文學案内編集局の調査による、朝鮮と台湾などの植民地を含めた、日本全国における『文學案内』の同人雑誌の一覧表がある。その表に『臺灣新文學』が確認できる。また、同年7月号の『文學案内』には貴司山治「同人雑誌批判」⁹という文章があり、『臺灣新文學』について「筆者の受け取った雑誌には検閲の紫印がパタリとおしてあつた「俺等は奉」全文が切りとられてある」と記されており、当時『臺灣新文學』が検閲を受け、一部が掲載禁止となったことを伝えている。その際、「他の二作品もまだ稚いし澤山のつてゐる詩もこれからといふ所だ。それだけに台湾人が日本語で書くことの困難さが思はれるが、將來の發展をのぞんでやまない」と、『臺灣新文學』の内容の稚拙さを指摘している。ただし、他の地方同人誌にも似たような欠点が指摘されており、その稚拙さを「台湾人が日本語で書くことの困難さ」に帰結し、期待を寄せているといえる。以上二点を合わせると、『文學案内』と『臺灣新文學』は単に類似性があるのみに留まらず、帝国の首都東京にある『文學案内』が指導的立場にあり、周縁的な植民地にある『臺灣新文學』は地方同人誌として位置づけられているといえるだろう。

葉陶が「愛の結晶」を他の雑誌ではなく『文學案内』に投稿したのは、『文學案内』のこうした指導的立場が関わっているのではないか。しかし、『文學案内』は植民地作家と女性作家に興味を示していたにもかかわらず、「愛の結晶」は入選しなかった。その理由は、果たして「技法の拙さ」や「作品の短さ」のみであろうか。次節に詳しく分析してみたい。

2. 2. 日本プロレタリア女性文学の系譜

『文學案内』の特集「新女性作家作品号」には新人女性作家の3編が入選した。貴司山治の「投稿審査発表 新しい女性作家の作品について」¹⁰によると、入選した3編の、枚数は「からす瓜」12枚、「信子の二三日」43枚、「ピラ」43枚となっている。8枚の「愛の結晶」は「信子の二三日」や「ピラ」に比べれば枚数が少ないが、「からす瓜」に比べたらそれほど短いとは言えないように思われる。であれば、作品の短さ以外の原因を検討するべきだろう。また、「からす瓜」についての貴司の評価にも「この作品には積極的なもの反抗（ママ）的なものは何もなくてその点で作者にもつと眼を上げろとはいひたくなる（同143頁）」など、作者の着眼点の拙さが指摘されている。それでも入選した理由は、「當然暗い今日の日本の貧農の一家の運命は、よく書けてゐる。たゞ今日の貧農のこの運命が、どうすれば打開できるかを、作者が見出し、その見地に立つて書けば、その暗さは暗いまゝで明るく書ける。その書き方がそしてほんとうのリアリズムなのである（同143頁）」とあり、着眼点は拙いものの、当時日本の貧農、つまりプロレタリアの運命がよく書けている点を評価している。

「信子の二三日」の選評には、「こういふ境涯、こういふ立場は今日の日本の勤労婦人、中産階級の婦人、のみならずプロレタリア婦人にも共通の立場であると思ふ。即ち日本の勤労女性はその自覚の第一歩に於て、かの女を蝕まうとする青酸加里的毒素-日本の封建主義との闘争に直面しなければならない。（同143頁）」と示されている。貴司山治が評価しているのは「婦人」というより、「日本の封建主義との闘争」つまり階級闘争であるとわかる。「ピラ」の選評には、「表現はまだ幼稚で浅いが」と小説技法の拙さを指摘しつつも、「一九三四年以後、積極的な領域から後退してしまつた日本のプロ文學の今日の風潮の中ではむしろ時代おくれにみえるくらゐハツキリと意識的に闘争的生活を描きだした者である」と評し、「これは今度の募集作品中の一番いい作品でそして純粹のプロレタリア小説ではないかと思ふ（同143頁）」と絶賛している。「新女性作家作品号」であっても、選者の貴司山治は「女性」を評価の中心に置かずに、「プロレタリアの眞實」や、「階級闘争」を重要視していることが、これらの選評に示されている。貴司山治のみならず、次月1936年4月号に掲載された読者の感想7篇からなる「三月號・新女性作家の創作への批評」にも、「意識的闘争」、「反抗的精神」、「団結と闘争の経験」などの言葉が散見されることから、『文學案内』とその読者層の性質がよくわかる。

一方、葉陶の「愛の結晶」はタイトルが表すように、まさに恋愛結婚の尊さを謳った作品である。作品のモチーフは「貧しい母親と病む子供」であり、子宝に恵まれながら、貧しくて十分な食事を与えられずに子どもを失明させた素英と、裕福な経済環境にいるのに、夫に梅毒を伝染されて子どものできない寶珠が、互いの不幸を慰め合うという物語である。物語の大筋は、一方に貧困のつらさ、一方にブルジョア階級の墜落という日本プロレタリア文学によくあるものと大差がない。しかし本作の結末は「愛の結晶」は金の爲めに盲目にされた。理想は金

の爲めに闇に包まれて居る。時代が悪いのだ。一と寶珠は考へた。(本文引用、174頁、以下同)」とあるように、階級や封建主義への批判には至らず、「金の爲めに」不幸になったというにとどまっている。「夫は社会運動で数年間暗い生活を強制された(173頁)」など、僅かながら植民地政府への批判が読み取れるが、「金さへあれば助かる可愛い子の目の腐り行くのを拱手傍観し、自分ながら厭な存在になつて(173頁)」と続き通り、金があれば問題が解決するという結論に片付けて、無力な自分を責めるのみで、一家が貧困になる根本的な原因、植民地主義や資本主義や封建主義などを不問に付す形とした。つまり「愛の結晶」の結論はプロレタリア文学の主張からは、焦点が外れているように思われる。

もっとも、日本のプロレタリア女性文学には、「貧しい母親と病む子供」というモチーフの小説が多くある。例えば、平林たい子の「施療室にて」(『文芸戦線』、1927年9月)や、松田解子の「乳を売る」(『女人芸術』、1929年8月)などが挙げられる。「施療室にて」は、社会主義者である主人公北村光代が、夫も社会主義者で入獄したため、満洲の慈善病院で一人で子供を産み、その子供を乳児脚気で亡くしたあと、「旅順監獄分監」に入獄する小説であり、外地にいるプロレタリアートの悲惨な運命と、政府や社会への告発を生き生きと描いた作品である。「乳を売る」は、夫が「ブタ箱」(警察署の留置場)に置かれ、乳母奉公をしている貧しい女性が、生後7ヶ月の我が子を背負いながら、自分の母乳を我が子には与えないで、「人乳」として三歳のブルジョアの「お坊ちゃま」に売るという作品で、「プロレタリアートの子は生まれながらにブルジョアの餌食にされ、女性の母性すら搾取されるという、階級社会の構図を剔抉したプロレタリア文学として成功している」¹¹と評価された。

「施療室にて」も、「乳を売る」も、「運動」と「階級」を明確にテーマにしている。「愛の結晶」にも「夫は社会運動で数年間暗い生活を強制された」という、運動を仄めかす記述はあるが、政府や既成社会への戦い、あるいは階級闘争は明白に描かれてはいない。「施療室にて」の先行研究では、「目的意識」が問題になっていると指摘された¹²。「目的意識」というのは、プロレタリア文学運動の指導的な立場に立った評論家青野季吉が、1926年9月号の『文芸戦線』に発表した「自然生長と目的意識」という論文で提出した概念である。青野季吉は、「目的意識」について、以下のように述べた。

プロレタリアの生活を描き、プロレタリアが表現を求めることは、それだけでは個人的な満足であつて、プロレタリア階級の闘争目的を自覚した、完全に階級的行為ではない。プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち階級的意識によって導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてここに始めて、プロレタリア文学が起るのであり、起つたのである。¹³

この「目的意識」については、後日一連の論争に発展し、「プロレタリア階級の闘争目的を自覚し」なければならないことを明示して、1920年代後半の日本プロレタリア文学に大きな影響を与えた。「施療室にて」や、「乳を売る」は、このような「階級闘争目的の自覚」を明確にもつ

ているからこそ、評価されたのである。しかし、葉陶の「愛の結晶」には、これほど明確な「階級闘争目的の自覚」は示されていない。プロレタリアートの素英とブルジョアの寶珠の階級の違いは対立関係とならず、物語の冒頭から不幸を慰めあう親密関係にある。二人の悲惨な境遇は政府や社会などのためではなく、「時代が悪いのだ」という。最終的に問題とされるのは「階級」ではなく、「金」である。

1928年には「藝術大衆化論争」が起き、中野重治をはじめ、鹿地亘、蔵原惟人、林房雄など、当時の日本プロレタリア文学における重要な思想的指導者や作家たちが、プロレタリア文学にとっての芸術とは何か、目標とする大衆とは誰か、と論じた。1930年、日本プロレタリア作家同盟中央委員会（ナップ中央委）は「藝術大衆化に関する決議」¹⁴を発表し、描かれるべき題材を10点に整理し、論争に決着をつけた。例えば「7 農民、漁民等の大衆的闘争の意義を明らかにするような作品」、「8 ブルジョア政治、経済過程の諸現象（中略）をマルクス主義的に把握し、それとプロレタリアートの闘争を結びつけた作品」などが挙げられている。「10 植民地プロレタリアートと国内プロレタリアートの連帯を明らかにするような作品。プロレタリアートの国際的連帯心を呼び起こすような作品」という、植民地との連帯を重要視する点も見られる。一方、恋愛という題材に関しては、「例えば、忍術武勇伝に於ける「忍術」又は「恋愛」の要素の如きは、主題のマルクス主義的把握を歪曲する以外の効果を持って居ない」と手厳しく批判された。恋愛はプロレタリア文学に相応しい題材ではないと判断されたわけである¹⁵。従って、階級闘争の要素も、植民地プロレタリアートと国内プロレタリアートとの連帯も書いておらず、その上〈恋愛結婚〉を謳った「愛の結晶」は、ナップ中央委が示したプロレタリア文学の基準を満たしていないことになるだろう。

葉陶の「愛の結晶」は楊達の「新聞配達夫」のような、鮮烈な中央文壇デビューはできなかった。「新聞配達夫」も、選評にて「この小説は、決して上手でない。むしろ、小説にはなつてゐない」¹⁶、「これはまだ充分小説になつてゐるとはいへない」¹⁷など、やはり「技法の拙さ」で批判されており、「拙さ」は落選の主要な理由にはならなかったといえる。「愛の結晶」において、評価を分けたのは、むしろ内容に関わる点ただのではないだろうか。「愛の結晶」はこれまで見てきた通り、物語のモチーフや、プロレタリアートとブルジョアの人物配置において、日本プロレタリア文学に共通する部分があるように見えるが、それらは中心にはなっていない。「テーマに肉がつき」、「人物が實在的に」なる必要があると貴司は評したが、貴司の関心と「愛の結晶」が問いかけた問題とは根本的に違っており、それゆえ、十分な評価を得られなかったのではないか。

3. 反逆的な恋愛結婚とその後

3. 1. 台湾における〈恋愛結婚〉の文脈

日本プロレタリア文学の主流から評価されなかった「愛の結晶」であるが、それでは、どの

ように再評価できるだろうか。本論では葉陶の「愛の結晶」が、「女性の連帯」と「恋愛結婚の尊さ」を中心に描いていることを確認し、〈恋愛結婚〉という文脈から読んでみたい。

小説の冒頭部には、主人公素英について次のように描写されている。

もと公学校の女教員であつて、その月給を以つて親を養わなければならぬ惨めさから、とうとう婚期を逸し悩ましい生活を辿つて來た。が、社會運動家瑞昌の主義に共鳴し、戀愛した當時は、暫し春の氣分を満喫した。(171頁)

まず注意しておきたいのは、この「惨めさ」というのは、経済的な惨めさではないということだ。張季琳の研究¹⁸によると、公学校教員の給料は男性の警察、課長級の地方公務員よりも高く、女性の就く職業では医者と中学校の教師に次ぐ第三位なので、決して貧しくはなかった。この「惨めさ」は経済的に自立しているが、「親を養わなければならぬ」ことによって「婚期を逸らした」ことを指しているだろう。素英の家は自由恋愛を許した、比較的近代価値観を持つ家庭だと思われる。一方、寶珠は次のように語られる。

自分と呼んだのが女学校時代からの仲よしの寶珠だと分かると、素英も一時に落着いた。彼女の境遇に反して、寶珠はJ市屈指の漁業資本家の娘に生れて、二千元の持参金を持つて、父の目的の爲めに該市S係長のところに嫁いたのであつた。素英の目には、寶珠は苦勞知らずの呑氣な身分であつた。だから素英は自分の神経を軟ける爲めに暫く寶珠の平穩な話が聞き度くなつた。こうなると、曾つては輕蔑した寶珠に對して、或るなつかしみを覚えるのであつた。(171-172頁)

「或るなつかしみを覚える」というように、素英は二人の間に階級の差を感じてはいはいても、女学校の同窓生として、寶珠に対して敵対心ではなく開かれた心を持っている。同じ女学校出身の寶珠は政略結婚に近い理由で親の決めた結婚をさせられた。仕事経験のない、裕福な実家と婚家、親の決めた結婚など、自由恋愛で結婚した素英とは対照的で、台湾の伝統的結婚様式といえる。そして、

「キット可愛いお子さんだと私思ふわ…」／「どうして?…」／「だつて…愛の結晶ですもの…ほほほ…」／と寶珠は笑つたが、その笑ひには大分自嘲的な響きを帯びてゐ、今にも涙がこぼれさうな顔付だつた。(172頁)

というように、寶珠は愛し合う二人の間に生まれた素英の子どもを「愛の結晶」と呼び、自らの愛情のない結婚には「自嘲的」な様子が見える。ここでは、〈恋愛結婚〉の尊さが強調されている。

泣いて泣いて、全く手の施しやうのなかつた寶珠も、三十分ばかり経つた時分には、泣き飽きたと見えて、素英の太腿から頭を上げながら自分で涙を拭いて、コンパクトで顔をつくろつた。／「何がそんなに悲しかつたの?…ねえ?…」／素英が寶珠の顔をのぞき込んで聞く。／「私し子供が欲しいの……」／「まだ出来ないの?…あなたは?…」／「いいえ…出来たには出来たけれど…白痴なの…梅毒性の…」／と言つて再び泣き出しさうにな

った。(173頁)

彼女は夫に性感染症(梅毒)をうつされ、影響は子どもにも及ぶ。結婚という制度を通じて、夫としか関係しない「正しい性」を守っていても、女性の安全は保障されない。家庭の外で「正しくない性」を楽しんだ男性の代わりに、罰を受けるのはいつも女性だった。〈伝統的な結婚〉は〈恋愛結婚〉との対極に置かれ、封建主義で男性中心なものとして批判されている。

ここまでテキストを辿ってきて見えたのは〈恋愛結婚〉への謳歌と、「伝統的な結婚」への批判である。主人公の二人はエリート層の女学校出身なので、30年代の日本本土の文学者の目には、大正時代の「青鞥」をはじめとする女性知識人の自由恋愛論を想起させ、いささか「古い」と映ったかもしれない。「愛の結晶」が発表された1936年に最も近い、日本プロレタリア文学の恋愛論をめぐる論争は、20年代後半の「コロンタイズム」と呼ばれた論争である¹⁹。高群逸枝を始め、平林たい子、平塚らいてう、神近市子、山川菊栄など、女性知識人はコロンタイズムを批判し、それを好意的に受け入れる林房雄、武田麟太郎などの男性知識人と激しい応酬が展開された。「コロンタイズム」論争で注目されたのは「労働婦人の恋愛」や「新しい恋愛観」だけではなく、「母性」の問題として挙げられた「妊娠・出産」、さらに「中絶」についても論議されてきた。この文脈から見ると、単に〈恋愛結婚〉の尊さを説き、〈伝統的な結婚〉を批判する「愛の結晶」に新鮮さを感じられなかった可能性は高い。

しかし植民地台湾には〈恋愛結婚〉に関する別の文脈がある。台湾社会に恋愛結婚という新しい理念が登場したのは、洪郁如の研究によると、1920年代のことだった。1910年代に日本内地留学風潮が始まり、台湾人留学生は自由恋愛に新思潮として直接接触し、台湾に持ち帰って、台湾の社会文化改革の中心的課題として見なした。また、台湾にいる中学校、高等学校、高等女学校の学生たちは、日本語を通じて日本内地および世界各国の近代文学を幅広く愛読し、このような自由恋愛の思潮を受け入れる土台をつくり出していた。台湾における「自由恋愛」の思潮はエレン・ケイの影響を多分に受け、「結婚」とセットになって論じられたので、〈恋愛結婚〉が理念的に語られた²⁰。これは大正期日本の恋愛論に多分に影響を受けたとわかる。例えば飯田祐子が、「(厨川白村の恋愛論は、:筆者注)恋愛と結婚と生殖を見事に三位一体化させる議論で、国家を支えるイデオロギーとして恋愛を論ずる基盤を提出した恋愛論といえる」²¹と指摘したように、「恋愛」と「結婚」がセットになる点は大正期日本の恋愛論と重なっている。大正期日本の恋愛論の背景には、西川文子の「新真婦人会」や、平塚らいてう等の「新婦人協会」、奥むめお等の「職業婦人社」など、たくさんの女性が産児制限、女性参政権、女性労働者などの問題に取り組み、婦人解放に努めた動きもあった。その中には「大日本帝国」のあり方に異議を申し立てる山川菊栄等の「赤瀾会」のような左翼女性運動もあったが、主流はやはり「国家を支えるイデオロギーとして恋愛を論ずる基盤を提出した」、「きわめて体制的なもの(同614頁)」であった。一方、植民地台湾における〈恋愛結婚〉には、単に社会文化改革や、新しい結婚様式を掲げるに留まらず、植民地政治批判にもつながったという特徴がある。これにつ

いて、洪郁如は次のように論じている。

日本の台湾統治に対して、恋愛結婚の論議は一見したところ植民地政治批判のように脅威とならず、総督府からの弾圧とは無縁なもののように見えたが、実際はその言論の展開する方向によって、当局の干渉を受ける場合もしばしばあった。そのなかで「婦人運動」への広がりには新生の知識人集団である新女性の動員を引き出し、台湾人女性エリートが抗日民族運動に吸収される危険を伴うため、当局にとっては最も敏感な側面であった。²²

中学校、高等女学校の学生、卒業生たちは、〈恋愛結婚〉の思潮を学ぶと同時に、婦人運動の展開もはじめ、最終的には植民地統治の根幹を揺るがす運動になった。最初の婦人団体は1925年2月、台湾の中部に成立した「彰化婦女共励会」であり、女性解放や婚姻自由と恋愛などを提唱した。1926年2月には、7名の台湾中部名門出身の青年男女が密かに厦門へ渡航する計画をして、そのうち林士乾と楊金環という二人の恋人が渡航に成功し、他の5名は計画がばれて失敗に終わったという、「彰化恋愛事件」が起きた。²³洪は次のようにまとめている、

彰化恋愛事件の展開を左右していた要素は、台湾人社会内部の二つの対立軸によって整理できる。一つは伝統文化と社会改革の見地の対立をめぐる「保守-改革」の新旧衝突、もう一つは植民地の政治的立場の相違をめぐる「協力-対抗」という対立であった。²⁴

つまり、〈恋愛結婚〉を始点として婦人運動が展開したが、その運動の目指した方向は単に台湾の伝統社会、文化を改革することだけではない。植民地政府は伝統社会とうまく連携して植民地統治を果たしているのだから、婦人運動は植民地統治への抵抗にもつながったのである。

葉陶はまさにそれを経験した一人であった。先に述べたように、葉陶は1926年、「台湾農民組合」に加入し、女性として先頭を切って植民地政府と資本家に反抗する農民運動に参加した。そして、台湾農民組合に参加した時期に、楊達と知り合い、恋愛結婚をした。「愛の結晶」の背景には、葉陶のこのような実体験がある。

〈恋愛結婚〉は思想を構成し、単なる個人的な選択におさまるものではない。婦人解放、社会改革、文化改良、植民地統治への抵抗など、様々な目的やイデオロギーが、混ざりあい同時に発生している。〈恋愛結婚〉は、階級闘争ではないものの、「台湾人」そして「新女性」という、アイデンティティの自覚を生み出す潜在力を持っていたのである。1920年代台湾における〈恋愛結婚〉論は葉陶の「愛の結晶」の背景に溶け込んでいる。しかし、こうした台湾固有の文脈は、貴司山治、つまり30年代帝国の首都東京にいる日本の知識人には理解されなかった。貴司はこの「實在」性も潜在力も感知できなかったのであろう。

3. 2. 恋愛結婚後の新女性：〈女学生共同体〉と〈レズビアン連続体〉

葉陶の「愛の結晶」には、もう一つのテーマがある。それは女性の連帯である。この連帯はプロレタリア文学にある階級による連帯ではなく、階級をこえた女性というジェンダーによる連帯である。まず、夫（男性）への批判が窺える。「夫は社会運動で数年間暗い生活を強制され

た爲めに、肺結核に犯されて、人並の食物は勿論薬をさへ服めないでゴロゴロして居る。(中略)自分ながら厭な存在になつて、病める夫とゴロゴロして居るのである……。 (173 頁)」というように、社会運動で牢屋に入れられ、肺結核を患った夫を唯々「ゴロゴロして居る」という。そしてともに「ゴロゴロ」することになる自分を、「厭な存在」と述べる。この自己嫌悪には、夫への嫌悪感も滲んでいる。家庭の構成員として、少しも家計を助けようとせず、「稼ぎ手」として機能しない夫と失業した自分のせいで、可愛い我が子は失明してしまったのだった。

このような「機能しない夫」は、日本プロレタリア女性文学に前例が見られる。例えば「乳を売る」にも、同様の問題が描かれている。主人公光枝は乳母奉公に出るが、「冷蔵庫みたい」に冷え込んだ女中部屋にはふとんが用意されていない。夫に何度もはがきを書いたが、返信一つ返さず、ふとんも届かない。夫は、物語の最後まで登場しない。最後に光枝は夫の仲間の妻宛に手紙を書いて、夫の消息を尋ねつつ、奉公先での心情を綴る。夫に対する物憂さの一方で生み出されたのは女性の連帯であった。平林たい子の小説にも女性の連帯が見出せる。

ただし、このような前例にある女性の連帯はすべて、同じ階級内の女性たちの連帯だった。「愛の結晶」で連帯するのは、階級の違う二人である。前述した通り、物語は女学校での仲良しとして二人の対立関係を解除したところから始められている。

寶珠は一緒にならんで腰掛けた。素英はしみじみと寶珠の顔から身なりを見た。髪から足先迄如何にも手入れが行きとどいて居り、百貨店のショウ、ウインドーから飛び出して来た人形のやうに綺麗ではあるが、なんだか元気がないやうだった。肌は荒れてこそゐないが、自分に比べて、もつともつと血の氣がないやうに見えた。(172 頁)

この一節は素英が「しみじみと」寶珠を観察しているところだ。素英が寶珠を心配する気持ちが表されている。後に大泣きした寶珠を「とうとう自分の不幸も忘れて、慰めてやらなければならなかつた」²⁵という、素英は階級の分断でブルジョアの寶珠を批判することなく、むしろ仲間として心配し慰めている。

素英と寶珠の関係は慰め合うだけに留まらない。個人的なものではない「恋愛結婚」論のように、「愛の結晶」のなかの「母性」は共有されていく。

「まあ困るわね！欲しいてことが早く分れば…」／と素英は言つて嘆じた。この人に養つて貰えたら、自分達の愛の結晶も、ほんとに可愛く育つたらうに…と考へたのであつた。／「早く分ればつて…誰か呉れる人があるの？…ねえ？…」／寶珠は大分氣乗りになつて来た。／「いゝえ…私の…」／素英はドキマキした。／「あなたの？…あなたの愛の結晶を？眞實？…」／寶珠は信じられないもののやうに、併も、非常に欲しがつてあるかのやうに、言ふことがせつかちになつて来た。(174 頁)

素英も寶珠も養子を出す、あるいはもらうことに抵抗を感じていない。そして、素英は自分の子どもを赤の他人に養子を出すのではなく、「この人に養つて貰えたら」と考へている。寶珠には子どもを育てる経済力があるのはもちろんのことだが、お金さえあれば誰でもいいという

わけではない。恋愛結婚の結実を体現する〈愛の結晶〉は、誰にでも譲渡可能なものではない。女学校での旧友の寶珠だから譲渡が可能なのである。ここに二人の夫は介入していない。つまり、異性愛的なロマンティックラブイデオロギーに合致する、1920年代〈恋愛結婚〉の物語が、36年の「愛の結晶」では、女性の連帯を生むものに発展している。このような、女性の連帯をまず〈女学生共同体〉として読みたい。

女学生の出現は、植民地台湾社会において大きな意味を持っている。洪郁如は、「中・上層における女子教育の確立は、台湾人女性のライフ・コースを大きく変容させた。娘から妻へという伝統的なライフ・コースの中間に、「女学生」という猶予期間が新たに挿入されることになった」²⁶と指摘した。〈女学生〉は、植民地台湾社会にはそれまでに出現したことのない新たなグループであった。彼女たちは母親の世代、あるいは同世代の貧しい階級の少女たちと違い、実家から婚家へ嫁ぐ前に、〈女学生〉という身分を獲得し、他の〈女学生〉と同じ経験を共有することができるようになった。また洪は、〈女学生〉を生成する女学校という場には二重性があると指摘している。

植民地における女学校の二重性とは、それが外部から遮断された修行の場であると同時に、植民地社会へ開かれた唯一の窓でもあったことにより生じたものである。戦前の学校教育は台湾社会では「日本教育」と呼ばれた。そして女性らの「日本教育」は、台湾の在来社会の土壌から遊離して、直接に「和」「洋」折衷の新階層文化へのアクセスを可能にする場であった。他方、従来は家庭を唯一の生活空間としていた台湾人女性にとって、学校は「日本」という他者との直接的接触を日常化する場となった。²⁷

つまり、少女たちは〈女学生〉という身分を獲得すると同時に、新しく、「自分の」空間を持つようになる。この空間においては、日本を経由して欧米の科学や思想に触れ、空間外部にいる女性たちには見えない世界を見ることができる。そして日本語という新しい言語を習得することによって、女子教育に組み込まれなかったものを読むこともできる、「自由」を手に入れた。日本語の運用能力は、〈女学生〉の仲間意識を形成するのに役に立つ。さらに、日常的に「日本」という他者と直接的に接触することで、「台湾人」である〈女学生〉たちは思考する主体となった。身分の獲得、経験の共有、空間の所有、知識と言語の習得、主体の生成……とのように、植民地台湾の女子教育を通して、〈女学生共同体〉が誕生した。〈女学生共同体〉のもとで、素英と寶珠ははじめて個人という境界線を超えて、互いの経験を理解し合い、信頼し合うようになったのであり、それが母性を共有して〈愛の結晶〉を譲渡することを可能にした。

さて、本論ではさらに政治的な読みを加え、「愛の結晶」を、男性を排除する〈レズビアン共同体〉的な関係に読み換えたい。

ここでアドリエヌ・リッチの〈レズビアン連続体〉という概念を参照したい。リッチは「強制的異性愛とレズビアン存在」という文章において〈レズビアン連続体〉を以下のように提案した。

レズビアン連続体という用語には、女への自己同定の経験の大きなひろがり——一人一人の女の生活をつうじ、歴史全体をつらぬくひろがりをつくみこむ意味がこめてあって、たんに女性が他の女性との生殖器的性経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいさぐという事実だけをさしているのではない。それをひろげて、女同士のもっと多くのかたちの一次的な強い結びつきを包みこんで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆、実践的で政治的な支持の与えあいを包摂してみよう。またできれば、結婚への抵抗を連想し、(中略) そうすれば、おおかたが臨床医学的で限定されたレズビアニズムの定義のおかげで、把握できないところに置かれてきた女の歴史と心理の息づかいに、私たちは触れはじめようになる。²⁸

〈レズビアン連続体〉は女性同士の性交渉や欲望などを必要としない。それは非性的で、女性ジェンダーを中心とした、緩やかで開かれた関係である。そして「共有」や「絆」、「支持の与えあい」、「抵抗」に重きを置く関係である。素英と寶珠との間にはまさにこのような関係が生まれている。女学生という経験の共有と絆、互いの不幸な生活への支持の与えあい、悲惨な運命や時代への抵抗など、〈レズビアン連続体〉として読み換えることが可能だ。ただし、本論は〈レズビアン連続体〉にある「男 vs. 女」という二項対立関係を強調しない。もちろん本節の冒頭に挙げた通り、「愛の結晶」には夫への冷ややかな皮肉が書き込まれている。だが「愛の結晶」という作品は男を非難したり断罪したりすることや、異性愛的な関係を否定することを主眼においた作品ではない。ここで〈レズビアン連続体〉という枠組みを参照するのは、素英と寶珠と関係性に焦点を当てたいからだ。もちろん〈レズビアン連続体〉は〈女学生共同体〉に連続することができるが、素英と寶珠との関係性を〈レズビアン連続体〉として読むとき、植民地台湾社会では非常に限られた、ほんの一握りの女性しか参加できない〈女学生共同体〉の限定性を超えて、より開かれた女性の連帯が浮かび上がってくる。「愛の結晶」における〈レズビアン連続体〉という女性の連帯には、階級の分断を超え、より大きな何かに対抗する可能性が秘められている。例えば寶珠が最後に語った「時代」への対抗だ。

「愛の結晶」における「時代」とは何だろう。1935年、台湾総督府は「台湾博覧会」ともいわれる「始政四十年記念博覧会」を挙行政した。これはもちろん台湾における植民地統治40年の成果を誇示するものだった。先住諸民族を含め、台湾の住民たちの生活、文化、産業などを展示し、総督府の権力が台湾全島の隅々まで浸透していたことが表された。そして1937年、総督府は国民総動員本部を設立し、皇民化運動を推進した。台湾人の名前、言語、信仰など、固有の文化は悉く日本化されていき、緊迫化した日中戦争のために、帝国の臣民にされていった。その狭間の1936年に創刊された『臺灣新文學』の「創刊の言葉」の「臺灣の作家の爲めにも讀書家の爲めにも、臺灣の現実に沿ふた文學機關が緊急必要である」という言葉には、直ちに自分の文学を立ち上げねばという緊張感を読み取ることができよう。このような緊張感のあふれた「時代」に対抗するのに必要なのは、もはや階級の問題ではない。ブルジョアもプロレタリ

アートも植民地統治に呑み込まれるからだ。〈レズビアン連続体〉という階級の分断を超えた女性の連帯は、台湾人女性としてその「時代」に対抗する足場となったのである。

4. 結び

葉陶の作品は、戦前の小説「愛の結晶」と、戦後晩年の中国語詩作「我的教練真嚴厲」の二作しか残らなかった。作品の少なさからか、文学史において葉陶の作品はあまり評価されてこなかった。わずかな先行研究も作品単体の論と言うより、葉陶の生涯の中で論じたものが多い。もちろんそれらは示唆の多い研究ばかりだが、文学研究からの更なる討議の余地がある。

本論文は葉陶と楊逵が夫婦で主宰した雑誌『臺灣新文學』と、中央文壇『文學案内』との比較から始め、『臺灣新文學』が『文學案内』の地方同人誌的性格を持つことを明らかにして、葉陶が『文學案内』に「愛の結晶」を投稿した理由を探った。そして、「愛の結晶」が『文學案内』の選者貴司山治に評価されなかった理由が、「技法の拙さ」と「作品の短さ」だけではないことを指摘した。日本プロレタリア文学では青野季吉の「目的意識」論や日本プロレタリア作家同盟中央委員会の「藝術大衆化に関する決議」などの論争がなされており、入選した3作も、先行した作品も、上記の論争の結論に合致している。しかし「愛の結晶」はそのような明確な「階級闘争目的の自覚」を持っていない。代わりに〈女性の連帯〉とナップが批判した〈恋愛結婚〉をテーマにしているので、貴司山治には理解され得なかったのだと考えることができるだろう。

葉陶の「愛の結晶」が謳う〈恋愛結婚〉は、大正期日本の恋愛論と重なる部分があるが、大正期日本恋愛論の主流のような、国家を支える体制的なものというより、婦人解放、社会改革、文化改良、植民地統治への抵抗などという、当時台湾で起きた社会運動と関わり、「台湾人」そして「新女性」という、アイデンティティの自覚につながるものであった。「階級闘争目的の自覚」とは異なるが、封建主義や既成社会への反逆性という点からいうと、「愛の結晶」における〈恋愛結婚〉は決して問題を矮小化したわけではない。

また、「愛の結晶」は、男性への批判に留まらず、もっと開かれた「女性の連帯」に展開した。「愛の結晶」は30年代までの日本プロレタリア女性文学の系譜を継承した部分があるが、ただし「愛の結晶」で残酷な現実に立ち向かい戦っていく足場をつくるのは、階級闘争の自覚ではなく、女性の連帯だ。先行した日本プロレタリア女性文学作品にもゆるやかな女性の連帯を見出すことができるが、「愛の結晶」における女性の連帯は、植民地台湾社会における女子教育によって出現した〈女学生共同体〉であると同時に、更に「愛の結晶」を「共有」や「絆」、「支持の与えあい」、「抵抗」を重視する、より開かれた〈レズビアン連続体〉として読み得ることの意味を強調したい。〈レズビアン連続体〉には、階級の分断を超える台湾人女性としての抵抗意識も読み取れる。また、農民運動に身を投じて、植民地台湾日本語文学に積極的に関わった作者・葉陶の実生活に照らし合わせると、〈女学生共同体〉という枠組みでは片付けることのできない部分も多いというべきだろう。〈レズビアン連続体〉という挑戦的な読み方は、植民地台

湾日本語文学に長らく不可視化されてきた女同士の共同経験や連帯を浮き彫りにするだけではなく、「愛の結晶」をより豊かなテキストにもするのである。

楊逵文学記念館は『土匪婆 v. s. 模範母親：楊逵的牽手葉陶』のタイトルの文集を出版している。「牽手」というのは台湾語では「妻」の愛称だ。葉陶の前には必ず「楊逵の妻」という言葉がついている。葉陶の評価は「母親」あるいは「妻」という従属的地位から離れなかった。

「愛の結晶」を再読することによって、その評価を変えたい。本論では、「愛の結晶」は従来の日本プロレタリア女性文学の系譜を継承しつつ、台湾独自の文脈にて、新たな境地に達していたことを明らかにした。作品数が少ないとは言え、「愛の結晶」はその時代の台湾を代表する価値の高い作品なのである。

¹ 貴司山治「投稿審査発表 新しい女性作家の作品について」『文學案内』1936年3月号、文學案内社、p. 143

² 陳慈玉編『地方菁英與臺灣農民運動』、中央研究院臺灣史研究所、2008年

³ 康文榮編『土匪婆 v. s. 模範母親：楊逵的牽手葉陶』、楊逵文学記念館、2007年

⁴ 趙惠敏『自書與他敘-葉陶的文学與生命史研究』、國立中興大學台灣文學與跨國文化研究所、2012年

⁵ 「第三章 東京から台湾へ」中島利郎等編『台湾近現代文学史』、研文出版、2014年、pp. 110-111

⁶ 『日本近代文学大事典』第五巻、講談社、1977年、p. 360より抜粋整理

⁷ 「3分で知るエスペラント」、一般財団法人日本エスペラント協会、
<http://www.jei.or.jp/3pundesiru/> 最終閲覧日：2019年3月21日

⁸ 「全国主要同人雑誌総覧」、『文學案内』1936年4月号、文學案内社、pp. 131-133

⁹ 貴司山治「同人雑誌批判」、『文學案内』1936年7月号、文學案内社、pp. 144-145

¹⁰ 貴司山治「投稿審査発表 新しい女性作家の作品について」『文學案内』1936年3月号、文學案内社、pp. 142-143

¹¹ 渡邊澄子、「作家への足がかりに」、『気骨の作家 松田解子 百年の軌跡』、秋田魁新報社、2014年、p. 169

¹² 西莊保、「平林たい子「施療室にて」論—喪失される子供の視点から」、『福岡女学院大学紀要. 人文学部編』15、2005年2月、p. 100

¹³ 青野季吉、「自然生長と目的意識」、『文芸戦線』1926年9月号、平野謙ら編『現代日本文学論争史 上巻』、未来社、2006年、p. 426

¹⁴ 日本プロレタリア作家同盟中央委員会、「藝術大衆化に関する決議」、『戦旗』1930年7月号、

¹⁵ 詳しくは池田啓悟、「運動中の抑圧—「愛情の問題」をめぐる林房雄と中条百合子」、『宮本百合子における女性労働と政治』、風間書房、2015年、pp. 92を参照。池田は、1933年ナップ

が日本プロレタリア文化連盟（コップ）に改組された後も、「百合子の従おうとした指導方針こそ「愛情の問題」はプロレタリア文学運動の主題にならないと宣言した蔵原理論にもとづいていた」と結論づける。日本プロレタリア文学運動の中において、「愛情」は検討すべき問題として見なされなかった。

¹⁶ 徳永直、「新聞配達夫」について、『文学評論』1934年10月号、p. 198

¹⁷ 窪川稲子、「新聞配達夫」について、『文学評論』1934年10月号、p. 198

¹⁸ 張季琳、「葉陶—臺灣農民運動的「土匪婆」」、『地方菁英與臺灣農民運動』、中央研究院臺灣史研究所、2008年、pp. 171-173

¹⁹ 議論に火をつけたのは、林房雄が翻訳した「三代の恋」などが収録された『恋愛の道』（世界社、1928年4月）である。

²⁰ 洪郁如、「結婚様式の変容」、『近代台湾女性史—日本の植民統治と「新女性」の誕生』、勁草書房、2001年、pp. 186-198

²¹ 飯田祐子、「モダン恋愛」、『恋愛』、ゆまに書房、2009年、p. 612

²² 洪郁如、「運動参加への制限」、『近代台湾女性史—日本の植民統治と「新女性」の誕生』、勁草書房、2001年、p. 242

²³ 同上註、pp. 245-251

²⁴ 同上註、p. 253

²⁵ 同上註、p. 173

²⁶ 洪郁如、「台湾近代史との対話」、『近代台湾女性史—日本の植民統治と「新女性」の誕生』、勁草書房、2001年、p. 363

²⁷ 同上註、p. 366

²⁸ アドリエンヌ・リッチ、「強制的異性愛とレズビアン存在」、『血、パン、詩。』、晶文社、1989年、pp. 87-88